

## 星の子ルカのぼうけん

喜界町立喜界小学校 四年 上園 侑

夏の夜空は、星がきらきらとかがやいています。その中でひときわ目立つあの星は、おおぐま座の北斗七星の親子です。

「ああ、もうつかれたなあ。」

星の子ども、ルカがあくびをしました。

「じつとしていなさい。夜は動いちゃだめよ。」

お母さん星がいました。ルカは、お昼に遊びすぎたのです。もう、ねむくてたまりません。こつくり、こつくり……。

ヒューン、ヒュルヒュルヒュル、ドテン。ルカは、地面に落ちてしまいました。

「いててて。ここはどこだ。」

ルカは、あたりを見回しました。お母さんやお兄ちゃんたちがいません。

「ぼく、落ちちゃったんだ。」

ルカが歩いてみると、かんばんが立っていました。

「美しい村、喜界島」

「聞いたことないなあ。ぼく、早く帰らなくっちゃ。お母さんにおこられる。」

ルカが走っていくと、さとうきび畑がありました。

「どうしたんだい。そんなにいそいで。」

さとうきびおじさんが、ゆらゆら風にゆれながらいました。

「ぼく、まいごになったんだ。ぼくの家、どこか分かる。」

ルカがいうと、さとうきびおじさんは、少し考えていました。

「知らないな。でも、きみみたいに金色に光るものは見たことあるよ。」

「きつと、そこだよ。ありがとう。」

ルカは、教えてもらった道を進んでいきました。

しばらくすると、金色に光るものが見えてきました。ルカは、うれしくて走っていききました。でも、それは小さすぎ。オオゴマダラのさなぎだったのです。

「どうしたの。そんなにいそいで。」

オオゴマダラおくさまが、ひらりひらりとダンスをおどりながらいました。

「ぼく、まいごになったんだ。ぼくの家、どこか分かる。」

ルカがいうと、オオゴマダラおくさまは、少し考えていました。

「知らないわ。でも、あなたみたいにちかちかしているのは見たことあるわ。」

「きつと、そこだよ。ありがとう。」

ルカは、教えてもらった道を進んでいきました。

しばらくすると、ちかちかかかやくものが見えてきました。ルカは、とびはねて走っていきました。でも、それは大きすぎ。灯台のライトだったのです。

「どうしたんだね。そんなにいそいで。」

白やぎじいさんが、のっそり歩きながらいきました。

「ぼく、まいごになったんだ。ぼくの家、どこか分かる。」

ルカがいうと、白やぎじいさんは、少し考えていいました。

「知らんね。だが、おまえみたいにとげとげしているものは見たことあるわい。」

ルカは、教えてもらった道を進んでいきました。

しばらくすると、海の中に何かとげとげしているものが見えています。ルカは、パシャパシャ走っていきました。でも、それは色がまっくろ。ウニだったので。ルカはがっかり。もう、つかれて歩けません。とうとう泣き出してしまいました。

「うわあん、うわあん。帰りたいよう。」

そこへ、一人の女の子がやってきました。

「どうしたの。もしかして、まいごさん。」

「うん。ぼく、おうちが分からないんだ。」

「あなたのおうちは、あそこでしょう。」

女の子が指さしたところは、海の上でかがやく夜空。

「今日は、北斗七星が六つしかなかったのよ。おかしいわねって思ってたの。まさか、喜界島に来てくれたなんて。」

女の子は、にっこり笑っていいました。

「さあ、帰りましょ。」

「どうやって。」

「これよ。わたし、夜空をとぶの大すき。」

女の子は、ほうきを出しました。女の子は魔女だったようです。二人はほうきにのって、夜空へとびたちました。

「お母さん、みんな、ただいま。」

「どこに行ったの、しんぱいしたのよ。」

「あのね、喜界島っていうところに行ってきたんだ。」

「それでね・・・。」

ルカは、こうふんして話し始めました。女の子は北斗七星の親子をくるりとまわって、帰っていきました。

